

メルボンの各大學から名譽學位を受け、外國の多くの學會やアカデミの會員に推された。又、1915年にはナイトとなり、1926年には K. B. E. となつた。

グイソン氏の人格は多くの人を惹きつけ、其の部下のためには良い主人であると共に、良い友であつた。氏は Caroline Best 嬢と結婚し、二男六女を挙げたが、夫人は不幸にして1937年に死なれた。世界各國の天文家も、氏の家庭で心地良く歓迎された。氏は又、社會のために盡す所が多かつた。

慰め手として

本 多 顯 彰

科學史を見ると、科學の研究は人間に一番遠いところ、すなはち天文學に始まり、次いで物理學、化學、地質學を経て、生物學に至り、最後に人間の研究といふことになつてゐるといふことだ。これはバートランド・ラッセルの意見ださうだが、なかなか興味のある意見だ。

× × ×

科學も天文學となると、感情も偏見も混へないで、純粹に客觀的な觀察と研究とが出来さうに思はれ、物理學においてもさうだと思はれるが、生物學となるともう駄目だ。ましてや人間の科學となると、研究者自身が人間なのだから純粹な客觀など望むべくもない。この研究が一番後廻しになつたのも當然だ。

人間の科學は大いに發展を遂げ、その研究は微に入り細を穿つといふほどのものになつたが、一番大きい、そして最後の問題、すなはち人間は何であるか、何のために生きるかの問題は、おそらく永遠に解決されないであらう。尤も、これは科學の問題であるよりは、宗教の問題であらうけれども。

× × ×

しかも現代人は、この問題の宗教的解決よりはむしろ科學的解決を求めてゐる。そして、それは、まさに一命を君國に捧げようとしてゐる人々やその家族たちによつては切迫した必死の問題なのである。この頃生死の問題を扱つた書物の出版が目立つやうだが、それを貪り読み、そして恐らく幻滅を感じるだらう人々のことを思つて、私は熱いものを感じずにはゐられない。